

令和元年6月13日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04831

研究課題名(和文) 発達障害学生の移行支援に関わるセルフ・アドボカシー・スキル教育の実証研究

研究課題名(英文) Research on the development of self-advocacy skills related to employment support for students with developmental disabilities

研究代表者

小川 勤 (OGAWA, TSUTOMU)

山口大学・大学教育機構・教授

研究者番号：60448272

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は発達障害学生がその障害特性から就労が難しいという事実から、自分の特性を理解し、他者に説明し、自分が必要とする支援を他者に求めていく行動が起こせる力、セルフ・アドボカシー・スキル(SAS)の獲得を目指した教育および支援方法について研究を行った。研究期間中に、仕事チャレンジや学内インターンシップ等の取組を実践した。その結果、単発の就労体験を行って課題を発見できても、それを乗り越えて就労に結び付くにはかなり困難が伴うことが明らかになった。このため、SAS獲得には、就労体験とフィードバックの連続的な支援と、実際の職場とのジョブマッチングを行う包括的かつ継続的な支援が必要不可欠と明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、これまでに大学で試みられてきた発達障害学生に対する就労体験等の取組は、課題を発見できても、それを乗り越えて就労に結び付けるには困難が伴うことを明らかにしたことにある。また、セルフ・アドボカシー・スキル獲得には、就労体験とフィードバックの連続的な支援と、実際の職場とのジョブマッチングを行う包括的かつ継続的な支援環境が必要であり、これらを提供できる就労支援事業所との連携が必要であることや就労支援事業所との連携を想定した移行支援モデルを研究する必要があることを提案したことにある。本研究の成果が移行支援に活用されることにより、発達障害学生の雇用機会の拡大に貢献できると考えている。

研究成果の概要(英文)：Students with developmental disabilities have the fact that it is difficult to work because of their disability characteristics. For this reason, in this research, we study a support method aimed at acquiring self-advocacy skills (SAS) that understands one's own characteristics, explains it to others, and asks other people for the support they need. During the research period, we practiced "work challenge" and "campus internship". As a result, it became clear that even if you could find a task as a result of working experience, it is quite difficult to get a job after overcoming it. For this reason, it became clear that comprehensive and continuous support such as job matching with the actual workplace is necessary in addition to continuous support of work experience and feedback in order to acquire SAS.

研究分野：特別支援教育

キーワード：セルフ・アドボカシー・スキル 移行支援 発達障害 自己理解 仕事理解 就労支援事業者 企業実習 仕事体験

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

これまで発達障害に関する研究は、障害特性やそれに伴う支援ニーズ・支援方法に関する研究が多数存在し、研究成果の蓄積も進んでいる。しかし、大学から社会への移行を見据えた移行支援に関する研究は、これまでに十分行われてこなかった。セルフ・アドボカシー・スキル(SAS)獲得に関係する研究に関しては、片岡(2013)らによる、小・中学校段階におけるSAS獲得教育に関する研究や青年期における発達障害者の自尊感情回復に関する研究、さらにオーストラリアやシンガポール等の海外におけるSAS獲得に関する取組に関する研究成果がある。また、西岡(2007)らのソーシャル・スキル・トレーニング(SST)の臨床研究に関する論文など多数存在する。しかし、大学から社会への移行を意識したSAS獲得のための教育プログラム開発や支援方法に関する研究はこれまでに十分に行われてこなかった。この背景には、障害者支援がこれまで学生相談業務の一分野として捉えられ実施されてきたことや、支援者のこれまでの考え方では、日々の対処療法的な支援の延長が就職に結び付くという考えが多かったためである。しかし、それだけでは、必ずしも就職に結び付いていない(表1)。平成25年度大学卒業者に占める就職者の割合を障害種別ごとの就職率を見た場合、盲(30.0%)および発達障害(LD23.5%, ASD29.4%)の就職率が他の障害者に比べてかなり低い割合になっている。これは、共感性や社会性に乏しいという発達障害の障害特性等に多くの原因があると考えられるが、それ以外に、社会を見据えた移行支援がこれまで日常の支援活動の中で十分行われていないことを示している。本研究では、この未開発分野に実証的研究手法を用いて研究することにより、移行支援に向けて必要となる知識やスキルなどの新たな学問的な知見を見出すことを目指して研究に取り組んだ。

表1 障害種別就職状況

	身体不自由		重複	発達障害				重複	その他
	その他	視覚・聴覚		LD	ADHD	ASD	その他		
卒業者数	64	454	39	17	45	262	33	447	
就職者数	33	285	18	4	19	77	10	171	
就職者の割合	51.6%	62.8%	46.2%	23.5%	42.2%	29.4%	30.3%	38.3%	

	視覚障害		聴覚障害			身体不自由		
	盲	弱視	聾	難聴	言語のみ	上肢	下肢	上下肢
卒業者数	20	96	115	177	7	63	152	131
就職者数	6	56	84	115	4	44	86	70
就職者の割合	30%	58.3%	73%	65%	57.1%	69.8%	56.6%	53.4%

### 2. 研究の目的

本研究は、発達障害学生がその障害特性から就労に関して多くの困難を抱えているという事実から、大学から社会へ移行する間の支援プロセスに着目し、発達障害学生自らが「自分の障害特性を理解し、他者に説明し、自分が必要とする支援を他者に求めていく行動を起こせる力」、すなわち、セルフ・アドボカシー・スキル(SAS)の獲得や、その際の支援者の支援方法について実証的な研究を行った。従来の発達障害学生支援は、各自の障害特性に応じた対処療法的な支援(修学支援等)が中心であった。しかし、大学から社会への移行を見据えた支援では障害学生自らが障害特性を理解するとともに、自らの障害特性に合った仕事の理解という教育的アプローチからの支援が欠かせない(図1・図2)。また、この研究の成果が、移行支援やSAS獲得の教育プログラムに活かされることにより、発達障害学生の大学から社会への移行がさらにスムーズになり、潜在的に優れた才能を持った発達障害学生が社会で活躍する機会がより増えるとともに、大学から社会への移行が円滑化されることを目指した。

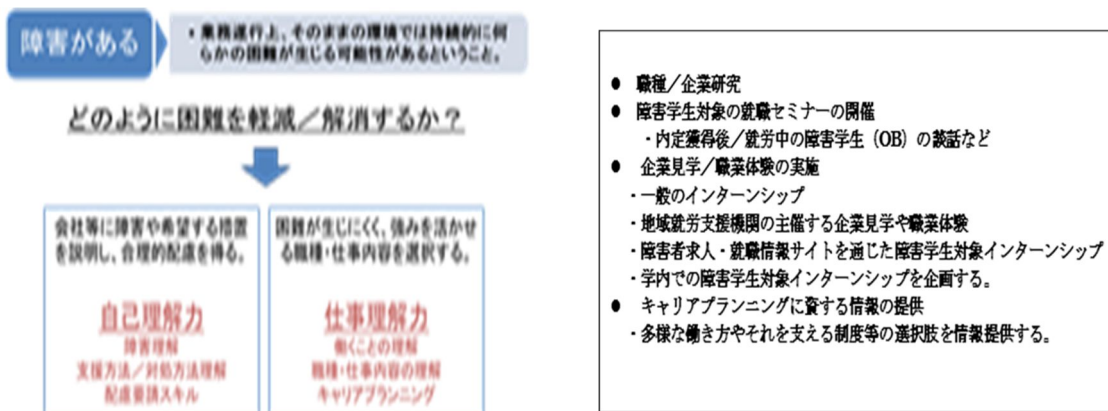


図1 就労に向けて必要となる知識や技能

図2 仕事理解の内容

### 3. 研究の方法

本研究では、次の計画および研究方法を用いて研究を推進した。山口大学の学生特別支援室（SSR）や就職支援室における支援活動の中で、自己理解を高めるための新たな支援方法を試み、自己理解に結びつく有効な方法を抽出し、そのメカニズムを解明した。（自己理解を高める支援方法の解明）：主に28年度、SAS獲得を目指した教育プログラムの開発と、その有効性を検証する（SAS獲得を目標とした教育プログラム開発と検証）。具体的には、就職支援室と共同で「学内インターンシップ」や「仕事チャレンジ」等のしごと体験実習プログラムを開発し実施した。：主に28-29年度、本人、支援者および上記の体験実習参加者等へのヒアリングやアンケート等を通して、SAS獲得を高めるための自己理解や仕事理解の支援方法や開発した教育プログラムの有効性を検証するとともに、実施上の課題を明らかにした。：主に29-30年度

### 4. 研究成果

本研究は発達障害学生がその障害特性から就労に対して多くの困難を抱えているという事実から、大学から社会へ移行する間の支援プロセスに着目し発達障害学生自らが「自分の特性を理解し、他者に説明し、自分が必要とする支援を他者に求めていく行動を起こせる力」、すなわち、セルフ・アドボカシー・スキル（SAS）の獲得およびその際の支援者の支援方法について実証的な研究を行うことを目的としている。

この3年間におよぶ研究の成果としては、補助期間中に就職支援室や山口大学の事務組織、大学生協の協力を得て実施した「仕事チャレンジ」や「学内インターンシップ」等の取組から、SAS育成していくための環境や実施上の課題について分析した結果、予め支援を受けられる環境が準備されている場合には、障害受容を含む自己理解や障害特性に合った仕事理解を高めることは比較的容易であることが明らかになった。また、受け入れ環境が事前に十分整備されている場合にはSASを育成していくことはある程度可能であることが分かった。その一方で、支援体制が十分整っていない企業のインターンシップ等では、高い能力や専門スキル、さらにSASを学内での取組により、ある程度修得できたとしても、社会性や共感性を高めることが可能かどうかは、企業実習等に参加した発達障害学生の聞き取り調査の結果から未知数であることが明らかになった。実際、ASDの学生にSSTなどの職業訓練を実施した後に、企業のインターンシップに派遣したにもかかわらず、受け入れ企業から社会的スキル等が職業上必要とされるレベルまでに到達しておらず、このままでは就労はかなり困難だと判断されたケースがあった。このように、単発の就労体験を行って課題を見つけたとしても、それを乗り越えて就労にたどりつくことは、かなり難しいことが本研究を通して明確になってきた。この課題を解決するためには、体験とフィードバックの連続的な支援と、実際の職場とのジョブマッチングをする支援を包括的かつ継続的に実施できる環境が必要であることが明確になってきた。そのため、本研究の最終年度には学外の就労移行事業所に対して訪問調査を実施し、大学と就労移行事業所との間で、就労支援の支援方法や役割分担に関して、どのような相互理解が必要であるかについて意見交換を行った。その結果、発達障害学生の就労支援を巡る大学と就労支援事業所の役割の相違点を明らかにするとともに、相互理解を深めることにより、連携の可能性があることを見出すことができた。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

『障害等のある学生の学内インターンシップ実施の意義と課題 山口大学における修学・就労の接続支援の試み』,岡田 菜穂子・小川 勤・田中 亜矢巳・柳下 雅子・金子 博・平尾 元彦, 山口大学『大学教育』第16号, p67-75, 査読有, 2019年3月

『大学における障害学生支援の現状と課題に関する研究 多様化・複雑化する支援ニーズと支援方法の変化』,小川勤,山口大学『大学教育』第16号,p7-16, 査読有, 2019年3月

『障害のある学生のための支援者育成と課題 - 山口大学におけるノートテイカー育成の事例から』,岡田菜穂子,小川勤,田中亜矢巳,金子博,山口大学『大学教育』第15号,p36-43, 査読有, 2018年3月

『発達障害学生のセルフ・アドボカシー・スキル育成に関する研究 移行支援における自己理解と仕事理解』,小川勤,山口大学『大学教育』第15号,p25-35, 査読有, 2018年3月

『障害等のある学生の相談対応にみる支援の現状と課題：山口大学の事例から』,岡田菜穂子,小川勤,田中亜矢巳,金子博,山口大学『大学教育』第14号,p41-47, 査読有, 2017年11月

『発達障害学生に対する組織的支援の現状と課題について - 修学支援・移行支援の課題と学内外組織との連携・協力 -』,小川勤,大学教育学会会誌 第39巻 第1号,p57-61, 査読有, 2017年5月

『発達障害学生への学生支援・大学教育の役割』,小川勤,大学教育学会会誌第38巻第2号,pp124-125, 査読有, 2016年11月

〔学会発表〕(計11件)

『障がいのある学生と共に学ぶ：合理的配慮の実践と課題』,小川勤, 島根県立大学平成30年度学生相談研修会,2019年2月20日

『大学教育のユニバーサル化に向けたアクセシビリティに関する授業の展開』,小川勤,岡田菜穂子, 大学教育学会第40回大会,筑波大学,2018年6月10日

『アクセシビリティ人材育成と大学教育の役割』, 小川勤, 日本高等教育学会第 21 回大会, 桜美林大学, 2018 年 6 月 2 日

『コミュニケーションを苦手とする学生への対応について - アクティブ・ラーニング型授業や移行支援での対応について - 』, 小川勤, 第 24 回大学教育研究フォーラム, 京都大学, 2018 年 3 月 21 日

『障害学生支援の現状と課題および地域連携の在り方について』, 小川勤, 枝廣和憲, 青野透, 岡田菜穂子, 大島啓利, 山本幹雄, 吉武清實, 山中淑江, 大学教育学会第 39 回大会ラウンドテーブル, 広島大学, 2017 年 6 月 10 日

『アクティブ・ラーニング実施上の課題と解決策 - コミュニケーションや対人関係を苦手とする学生の対応 - 』, 小川勤, 日本高等教育学会第 20 回大会, 東北大学, 2017 年 5 月 27 日

『障害者支援に関する地域リソース・シェアリングに関する研究 - EU-Net の概要と遠隔ノートテイク実験 - 』, 小川勤, 岡田菜穂子, 第 23 回大学教育研究フォーラム, 京都大学, 2017 年 3 月 20 日

『差別解消法施行後の障害学生支援の現状と課題について - 支援体制を再検討する - 』, 小川勤, 日本教育情報学会第 32 回年会, 福山平成大学, 2016 年 8 月 21 日

『差別解消法前後の大学における障害学生支援の変化と課題について』, 小川勤, 岡田菜穂子, 大学教育学会第 38 回大会, 立命館大学いばらきキャンパス, 2016 年 6 月 12 日

『差別解消法施行により整備すべきことと実施上の課題』, 小川勤, 枝廣和憲, 青野透, 岡田菜穂子, 大島啓利, 山本幹雄, 吉武清實, 山中淑江, 大学教育学会第 38 回大会ラウンドテーブル, 広島大学, 立命館大学いばらきキャンパス, 2016 年 6 月 11 日

『障害学生を対象とした修学支援の現状と課題について - 提案理由と山口大学の現状 - 』, 小川勤, 平成 28 年度国立大学教養教育実施組織会議第 4 分科会, 香川大学, 2016 年 5 月 20 日

#### 〔図書〕(計 4 件)

『グローバル時代のコア・ベクトル: 意外性への視線』, 浅間 正通, 山下巖, 小川勤, 小林猛久他 7 名, 「第 8 章 日本の大学教育のグローバル化を再考する - 今、求められる柔軟なカリキュラム設計 - 」, pp.173 - 191, 遊行社, 2018 年 12 月

『実践 情報リテラシー』, 浅間正通, 前野博, 小川勤, 中村真二, 西岡久充 復本寅之介, 村田幸則, 「第 8 章 プレゼンテーション」, pp.74 - 86, 同友館, 2017 年 4 月

『デジタル時代のクオリティライフ 新たに見つめるアナログ』, 浅間正通, 山下巖, 小川勤, 小林猛久他 5 名, 「第 7 章 アクティブ・ラーニングの本質」, pp.122 - 139, 遊行社, 2016 年 8 月

『主体的に学び意欲を育てる 教学改善のすすめ』, 林徳治, 藤本光司, 若杉祥太, 小川勤他 5 名, 「第 7 章 教育改善と FD」, pp.173 - 191, ぎょうせい, 2016 年 4 月

#### 〔その他〕

ホームページ等

なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究分担者

なし

##### (2) 研究協力者

研究協力者氏名: 岡田 菜穂子 (山口大学)

ローマ字氏名: OKADA NAHOKO

研究協力者氏名: 平尾 元彦 (山口大学)

ローマ字氏名: HIRAO MOTOHIKO